

今月の花

小諸宿に咲いた古布の花（2月19日撮影）

細江久美子（撮影・文）

小諸に用事があり市内を歩いていた
ら枝垂れ桜の枝に布の花が飾られてい
ました。地元の女性たちが古布を持ち
寄りチクチクと手縫いされた花たちで
す。

ひとつひとつ形が違い、いろんな花
が咲いています。



今月の詩

「あいたくて」

工藤直子

だれかに あいたくて
なにかに あいたくて
生まれてきた——
そんな気がするのだけれど

それが だれなのか なになのか
あえるのは いつなのか——
おつかいの とちゅうで
迷ってしまった子どもみたい
とほうに くらている

それでも 手のなかに
みえないことづけを
にぎりしめているような気がするから
それを手わたさなくちゃ
だから

あいたくて
（工藤直子詩集『あ・い・た・く・て』より）

ゆあさとしお（選・文）

くどうなおこの詩を読んでいたら、この詩に衝突した。「だれかに」「なにかに」「あいたい」、そんな「気がする」というところに惹かれた。「手のなか」の「みえないことづけ」を「にぎりしめているような気がする」という表現もスッとところに落ちてくる。子どもはみなそんなみえないことづけを手の中に握りしめて成長していくのだ。

社会的弱者をめぐる二つの事件の裁判が報じられている。一つは、千葉の小4 女児の虐待死事件。もう一つは、神奈川の津久井やまゆり園の殺傷事件。虐待された子どもも、殺傷された者たちも、彼らが握りしめているものに気づけない、感度の鈍い大人たちによって、「だれかに/なにかに」あうことを妨げられてしまった。悲劇の要因は、思い上がって自らの「正義」を疑わず、彼らの出会いを奪ってしまった、大人の怠惰な感性にこそあるのだ。

「だれ/なに」にあいたいのか？ どんな「ことづけ」を手わたしたいのか？ 私たちは、もう一度、素直に自問してみよう。

工藤直子（くどう なおこ、1935年～）は、台湾生まれの日本の詩人。やさしいことばで、子ども向けの詩や物語を多く書いている。

保育の現場から

小川香代子（武蔵村山市みらい保育園園長・こども支援士）

〇ふり返ると

保育園で働きはじめてからあつという間に四半世紀が過ぎました。私が大学を卒業した頃は、ちょうど「男女雇用機会均等法」が施行されたばかり、バブル景気真ただ中ということもあって、学生は「超」がつくほど売り手市場、内定を断る方がとても大変という、世間全般好景気の華やか雰囲気でした。

その頃の保育園はというと、まだ育児休業の制度が十分に整っていなかったこともあり、0・1歳児の入所は今より福祉的意味合いが強く、毎年定員に余裕があり、「保活」などしなくても希望すれば簡単に入所ができました。入所定員が埋まらないため、採用されても自宅待機している職員がいたほどです。保育者不足、待機児童が深刻になってきたのは、この10年くらい前からでしょうか。待機児解消のため、保育園の設置基準が緩やかになったり、保育者の処遇改善のため補助金を増やしたり、いろいろ策もとられてはいますが、その一方、2019年の合計特殊出生率は1.42と過去最低を記録し、少子高齢、人口減少社会に歯止めがかかっていない現状があります。にぎやかな子どもたちの声がいつまで続くのか。毎年複雑になる行政の保育施策に振り回されながら、待機児「0」のその先に何が起きるのか、考えずにはられません。少し前置きが長くなりました。

〇 Kちゃんのこと

風の便りで私の経験を書かせていただくことになりました。保育の現場から何をお伝えできると考えてみましたが、2月の「里子・里親」のワークショップの間、私の心の中にずっと去来していたKちゃんのことを書くことにしました。

Kちゃんが入園してきたのは、3歳からでした。事情により生まれてからすぐ、母親に抱かれることもなく、その年まで乳児院に預けられていました。生活の基盤が整ったので、家庭に戻れることになり、母親の第二子出産を機に園に入所となりました。年度途中ではありましたが、明るい笑顔ですぐにまわりの子どもたちの中に溶け込んでいき、その後、生まれきた第二子も入所し、家庭は落ち着いていたように見えました。

ところが、Kちゃんが5歳になった頃、顔や体に傷が見られるようになりました。その傷も軽いひっかき傷からだんだんとあざを伴うようなものに……。母親によるものでした。

傷ができはじめたころから、家庭支援センターや児童相談所の職員とともに様子を見守ってききましたが、ある日、とうとう緊急保護の決定がなされました。Kちゃん自身が決断し、荷物をまとめ、園からそのまま施設へ向かうこととなりました。Kちゃんは笑顔でしたが、送り出す私たちは、小さくなる背中が滲んでいくのを抑えることはできませんでした。

その日お迎えに来た母親は、特段取り乱すこともなく、淡々と事実を受け止め、第二子だけを連れて帰りました。その後、第二子は何事もなく、卒園していましたが、その間Kちゃんが家庭に戻ることはありませんでした。家庭より3歳まで過ごした施設の方がKちゃんにとっては安心できる場所だったということでしょうか。

あの時……。後悔、限界、でも……。今でも忘れられない出来事です。

鳥飼 玖美子「子どもの英語にどう向き合うか」NHK出版新書 2018.9

深谷昌志（東京成徳大学名誉教授）

子どもの英語については、「風の便り」（第2号、2018.6）で滝口優先生が英語をご専門とする視点から鳥飼玖美子著の「危うし！小学校英語」を紹介しておられる。それから2年後の2020年4月、小学3年生から「外国語活動」、5年生から年間70コマの教科として英語が導入された。小学校の教員にお聞きすると「意味があるんですかね」と疑念を持つ方が多いが、国際人の養成という大義名分のもとに小学英语が導入された。それだけに、今の段階で改めて英語学習の意味を考えたいと思い、本書を取り上げてみた。

○悪戦苦闘のわが英語会話

「英語」についての個人的な体験を語るなら悪戦苦闘の軌跡だ。JTBやKNTと子どもの海外キャンプやホームステイの企画立案を重ねる内に、日本の子と海外の子との違いに気づき、子どもを対象とした国際比較調査を実施したくなった。子ども対象の比較調査を始め、現地に入り子どもから話を聞くと同時に、校長などに調査を依頼する必要がある。調査の実施に立ち会い結果の報告にも行くので、現地を何回も訪ねることになる。当然、英語力が必要になるので、会話学校に通ったし英語の個人レッスンも受けた。ラジオの英会話は40年来の熱心なリスナーだ。それでも、英語の苦手意識を拭いきれなかった。そんな生活を重ねる内に、現地に入り1週間ほど過ぎると地元の人言葉が自然に耳に入るようになり、10日も経つと瞬間的に口から英語が出るのに気づいた。

子ども調査はアメリカだけでなく、欧州や中国、韓国、ニュージーランドなどでも実施したが、どこでも英語は国際語として通用した。そうした調査を20年程度重ねる内に、日常会話は苦にならなくなり、多少のスピーチ位はこなせるようになった。しかし、調査を実施するには教育委員会などとの正式な交渉が必要になる。フライトや宿を手配してくれるJTBの駐在員からの助言で、専門の通訳を会議に同行してもらうことにした。トップランクの通訳は、私の話す日本語を英語の枠組みに組み込み、英語的な思考に置き換えて相手に伝える。その技術に驚嘆すると同時に、自分の英語は短い挨拶のレベルだと痛感した。

○「第2言語として英語」(ESL)と「外国語としての英語」(EFL)

教育社会学専攻なので、英語研究の動向には疎い。そうした中で鳥飼玖美子氏の一連の著作は筆者にとっての英語理解の羅針盤となった。鳥飼は日本人の英語を考える際、まず、①「英語を毎日使う「第2言語として英語」・ESL (English as a Second language) と②「外国語としての英語」・EFL (English as a Foreign language) との違いを指摘する。(鳥飼玖美子他、「ことばの教育を問い直す」ちくま新書、2020年、p28)。

ESLと言われてもピンとこないと思うので、筆者の経験からの実例を挙げるなら、サンフランシスコのチャイナタウンに近い小学校では純粹のアメリカ人は3分の1程度で、中国系とメキシコ系の子がそれぞれ3分の1を占めていた。この学校では校内を3分し、中国系とメキシコ系の子には母国語である中国語とスペイン語で教育を行い、残りの3分の1程度の時間をESLとしての英語の授業にあてる。そして、アメリカンの子も英語の授業は3分の2で、残りは中国語とスペイン語かを選択し、その言語を使った授業を受ける。校長はうちの学校の子は全員がバイリンガルで、母国とは別の文化に接する。その結果、複眼の見方を持てるようになる。これは、どの子にも一生の財産になると誇らしげに語っていた。

それに対し、日本の子は日本語で完結できる環境にいるから、英語は「外国語としての英語」(EFL)となる。加えて、AIの翻訳器が飛躍的に発達し中3の英検3級レベルはむろん高3の英検準2級位なら即時に音声で訳してくれる(p34)。したがって、仕事で必要とする人以外、英語は「特に必要のない言語」(p150)となる。その結果、ESLの社会なら必要に迫られ英語を習得し

ようとするが、EFLの社会ではビジネス上で英語を必要とする人以外は英語を積極的に習得しようという意欲を持ちにくくなるという。

○「会話力」と「学習言語力」との違い

これまで、「英語を話す」と書いてきたが、鳥飼は英語を①「会話力」と②「学習言語力 (p28)」とに識別することが重要と説く。①「会話力」は「基本的対人コミュニケーション」(p29)のツールで、「聞き取りと発音」を土台とする「ふだん着の言葉」だ。端的にいえば日常的に交わす英会話で、一般的に「会話力」の習得は幼い程早いといわれる。現地に赴任した駐在員の子は2週間もしない内に英語で友だちと遊び始めるのに、母親は地元のスーパーの買い物に苦労するのがその典型であろう。その反面、「会話力」は現地を離れると急速に衰退する。帰国子女が半年もしない内に英語を話せなくなるのもその実例となる。それだけに、鳥飼は「早いうちから英語を教えればペラペラになる、というのは幻想です」(p198)と警鐘を鳴らす。たしかに「ペラペラ」レベルなら、子どもの場合、2週間も現地で暮らせばペラペラに近づく。

それに対して、鳥飼は本当の英語力とは、単なる「会話力」ではなく、②「学習言語力」だと説く。この「学習言語力」とは、「内容を理解し発信する認知的な枠組みとそれに見合う言語コミュニケーション能力」(p31)を意味する。具体的にいえば、「環境汚染」でも「国際化」でもよいが、そのテーマについて英語の英語の資料を自分で読み、自分の考えをまとめ、自分の言葉できちんと英語で話す力である。つきつめると、「学習言語力」の基本は「読み書きを通して必要な語彙を学び、ことばの論理的な組み立てを習得する」(p199)ことを意味する。

なお、鳥飼は、大村はまに造詣が深い刈谷夏子と夫君の刈谷剛彦(オックスフォード大教授)との3人の共著「ことばの教育を問い直す」(ちくま新書、2020年)を著している。同書は本書の専門書版の感じでやや難解だが、同書の中で、刈谷剛彦はオックスフォード大の教育の基本は「チュウトリアル」指導だと述べている(p233)。教授は毎週2.3名の学生に課題を与え、学生はそのテーマの資料を集め、レポートを作り、教授の前で発表する。それを毎週繰り返す。少人数の密度の濃い理想的な指導体制である。学生からすると、チュウトリアルの過程を通して、「読む—書く、読む—聞く、読む—話す」(p237)を経験する。その際、資料を「読み」そして「書く」が基本で、その上に「話す」や「聞く」が加わる。このチュウトリアルは鳥飼のいう「学習言語力」を具象化した1例であろう。

○「学習言語力」は不断の努力の結晶

なお、「学習言語力」には「2言語相互依存」(p27)の関係が見られるという。つまり、一つの言語できちんと読み・書き・話せる子(「学習言語力」を身につけた子)なら、他の言語への転換はそれ程困難ではない。日本の子に即して考えるなら、英語を駆使して「読み・書き・話す」を重ねて「学習言語力」を獲得するのは至難であろう。しかし、「母語である日本語の学び」(151)なら学習言語力を獲得できる。そうすると、英語の「学習言語力」をつける近道は日本語力をつけることとなる。たしかに、日本語の資料を読み、それをまとめて、レジュメを作り発表する。そうした経験を持たない子が英語で「学習言語力」を身につけることはありえない。それだけに、英語学者の鳥飼は、言葉の指導という意味で、日本の子の読み書きの力の低下に危機感を持ち、大村はまの「国語力」に関心を寄せている。

鳥飼は、中高と「6年間も習ったのに話せない」と憤っている」(p128)人もいるが、「小中高と12年間も体育の授業を受けてきたのに、速く走れない」「うまく歌えない」と怒る人はいない。まして、「一つの言語を学ぶのは自転車に乗る」のとわけが違う。したがって、「学校教育だけで流暢に話せるようになるかのような幻想」(p129)を持つのが問題で、本当の意味での英語の習得は絶えざる努力の上に成り立つという。

子ども調査を重ねている内に、現地の通訳と親しくなった。そして、日本から同行した添乗員について、「あの人はアメリカで勉強したそうですが、高校までですね」と言う。実際にその通りだったが、英語のレベルが違うらしい。通訳氏はUCLA育ちで、大学ではディペイドに多くの時間を費やした。刈谷氏のいうチュウトリアルほど厳密ではないが、今でも夢に出てくるような厳しく緊張する時間だった。そのお陰で英語を話せるようになったが、それでも、僕の英語は西海岸どまりで、

ボストンの大学では通用しない語学力だという。

ここまで辿ってきて、筆者の結論を述べさせていただけるなら、英語学者でないのだから「学習言語力」としての英語を断念し、「会話力」としての英語を楽しみたいと思うようになった。ただし、研究者として日本語の「学習言語力」はしっかり磨いておきたいと思う。

なお、冒頭でふれた英語科の話に戻るなら、「会話力」なら現地へ行けば2週間もいれば身につくからわざわざ学ぶ必要もないが、とって英語での「学習言語力」の獲得は望むべくもない。そうした意味では英語科は日本でも「英語も教えています」という形作りで、時間の浪費という感じがする。それなら、力を抜いて、世界には日本とは異質の文化がある。そうした異文化体験の場としてこの時間を活用してはと思った(了)

V. 会員談話室

会員自己紹介

汪 寒 (上海杉達学院 : Sanda Yniversity : 中国)

このたび、日本子ども支援学会に入会させていただきました汪寒と申します。現在、上海杉達学院外国語学院に勤務しています。江蘇省宿遷市の出身です。北京外国語大学大学院を修了しました。もともと専攻は日本文化ですが、以前から幼児教育にも関心を持っていました。専門の「日本文化論」の立場から、日本と中国の幼児教育について考えていきたいと思っています。

先生がたからいろいろなことを学びたいと思っています。どうか、よろしく願いいたします。

張 静 (上海杉達学院 : Sanda Yniversity : 中国)

張静と申します。入会させていただき大変感謝いたします。上海杉達学院外国語学院日本語科に勤務しています。2003年から岡山の就実大学、同志社大学大学院、愛知県立大学大学院国際文化研究科博士課程単位取得満期修了。上海杉達学院科には2014年から在職しています。

2000年以降、中国国民の生活が豊かになるにつれて、生活スタイルが変わりつつあります。子どもに対する養育方法も著しく変わってきています。科学的に養育しなければいけないとか、ネットで主流な知識を学びながら赤ちゃんを育てるということが一般的になってきています。

一方、外に出るとあちこちに設置されている早期教育機関から「お子さんはうちのレッスンを受けたら能力が上がります」などと勧められることも少なくありません。さらに、子どもがよい学校に入れるかどうかという「悩み」は幼稚園のころから始まります。保護者は、どうしても周りの環境に翻弄されますので、自分の子どもを自分の意志と力でどう育てていくのかが、今後の重要な課題だと思っています。

徐 曉純 (上海杉達学院 : Sanda Yniversity : 中国)

約二十年前、ある母親が自分の教育によって娘をハーバード大学へ行かせたという経緯が書かれた本が中国で大ブームになりました。当時、まだ高校生だった私は本屋でその本を立ち読みしているうちに、中に書いてある早期教育の仕方に感動したことを、未だにはっきり覚えています。しかし、当時の中国では幼児教育がまだそれほど重要視されていない状態で、子どもの資質や能力の育成より、漢詩や算数などを覚えさせることを優先していました。

二十年が経った今でも、どのような教育が子どもにとって一番いいのかという問題は教育者にとって尚大きな課題となっています。私自身も、大学教員として十年間学生の声の聞いている中で、どのような幼児教育を受けて今の彼らになったのかという問題をずっと考えています。

この度、日本子ども支援学会に入会させていただき、専門家の皆様からいろいろなことを学ぶ貴重なチャンスをいただき、誠に光栄に思っています。「文化交渉学」という私の専門を活かし、微力ながら日本と中国の幼児教育に力を尽くしたいと思います。

○小林未央 (NPO 法人くにとち農園の会・こども支援士)

一昨年、東京学芸大学で開催された教育支援人材認証協会の「子どもパートナー」認証講座を受講したことがきっかけで「子ども支援学」に興味を持ち、昨年は「こども支援士」の認証講座を受講させて

いただきました。

「NPO 法人くにたち農園の会」は、東京都国立市の谷保というハケ（崖線）の自然と田園風景が残る地域で、地域資源を活かし、都市農業と子育て支援の新しい形と価値を見いだしていきたいと、農園（田畑）と古民家を拠点に活動を行っています。主に、農園「くにたちはたけんぼ」では、親子向けの田畑の体験と放課後の子ども達の民間学童、古民家では、国立市地域子育て拠点事業「つちのこひろば」を開催。2020年4月には「認定こども園国立富士見台団地風の子」も開園予定です。

私個人としては、写真と編集の仕事をしなが、現在小学3年生の子育てをしております。日々、子ども達をとりまく社会や環境、学校生活での様々な変化や問題を目の当たりにし、NPOの理事として親として、そして大人として「地域の子ども達に私ができることはなにか」を模索しています。

「子ども支援学会」のニューズレターの専門家の方々のご報告やお話は、何よりもタイムリーで現実感があり、たいへん有り難く貴重な情報源となっております。今後とも、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

○川崎佳子（特別支援教育士・こども支援士）

小学3年生頃抱いた憧れの教師となり、小学校の現場で担任生活38年間。現役時代は学級崩壊の嵐が吹き荒れ、立ち止まることしばしばの日常を経験してきました。崩壊の現場を受け持ち卒業迄漕ぎ着けた実践は1999年毎日新聞「新・教育の森」で掲載され、苦しんでいる全国の教師と共感、励ましの場を持ちました。その時代の子ども達との交流は続いています。

その後、教育相談室6年間勤務の間は幼稚園、保育園、小学校の現場を歩き相談活動に従事しました。児童の発達課題、特別支援の学びの大切さを痛感し、学びなおし67歳で特別支援教育士の資格取得。今も学びの途中です。

現在は教育相談活動と近隣の小学校で、担任支援と特別支援活動を行っています。少しでも若い担任の方々への支援の力になれば、また子どもの幸せのための支援ができればと活動しています。子ども達の笑顔は私の希望です

○日高眞智子（NPO法人[子どもの教育・生活支援「アニー基金」](#)プロジェクト代表理事・こども支援士）

児童養護施設の子や里子たちが18歳になって、社会へ出た際の経済的乏しさを現実に目にするにつけ、子どもたちが十分な自立ができるようにと、過日NPO法人を立ち上げました。また保護者の生活力のなさや愛情不足を目にして、それに対する国家補助がどんなに少ないか。この子たちに、利息をつけない形で資金を貸し出し、生活の自立を見届け、支援を行うためのNPO法人の営みです。また、虐待にあった子ども達の精神力の脆さと立ち直ることに年齢差がないことを、身にしみて感じてきた年月でもありました。経済的には厚生労働省へのお願ひを繰り返す、少しずつ改善されてきましたが、心理的な自立への支援はまだまだの状態です。このような環境の中では、自立より自律の方が大きな問題を抱えている事に、世間の注目があってほしいと思っています。

非行に走る子、虐待を繰り返す親、または虐待される子については、保護者と子を愛情で包みながら、両者を改善していくことが重要でしょう。法律的に、親と子の全てに関わる家庭裁判所の機能をもつ「相談センター」を各都道府県に設けてほしいと思っています。今の児童相談所の仕組みは、たくさんの無理をかかえているように思います。一人一人に、専任の心理アドバイザーが必要な親と子どもたちをみると、児童相談所とタイアップした「親子相談所」を立ち上げたいと思って、署名活動を続けております。

○門脇薫子（かどわきまさこ/[大和幼稚園](#)副園長・こども支援士）

大学卒業後、大手企業に就職。その後、英国国立 The University of westale Upon Tyne ニューキャッスル大学大学院教育学部幼児教育学科でDAES(Diploma in advanced Educational Studies)ディプロマを取得、翌年にMaster of Education (教育学修士)を取得後、イタリア、北欧（ノルウェー、スウェーデン）の国々の幼児教育を視察し帰国。98年デンマークの首都コペン

ハーゲンで開催されたOME P（世界幼児保育・教育機構）の世界大会では、子どものジェンダー（社会的な性差）について発表しました。

帰国後は、求めに応じて各種会議の通訳などの傍ら、祖母が84年前に創立した、中野区にある私立「大和幼稚園」で、留学中に学んだ子どもの興味・関心を大切にしたい子ども主体の保育の実践のために、保育内容の改革に着手してきました。

都会のど真ん中の私立幼稚園ですが、畑や田んぼもあり、食育の活動、泥んこ遊び、造形の活動などを大切にしています。中でも、イタリアのレッジョエミリアの教育に衝撃を受けたため、プロジェクト型保育の実践を通して、子ども同士の主体的で対話的な深い学びを通して、自己肯定感を高めたり、ねばり強く物事に取り組む非認知能力が育っていくことを目標に、保育実践をしています。

しかし私立幼稚園は現在、保育料の無償化によって（保育園が完全に無償化されさらに保育園の数が激増しているため）大打撃を受けています。この先、少子化の影響で私立幼稚園は存続が危ぶまれてきています。しかし、何とか踏ん張っております。

○吉田佳代（つくば市立東小学校教諭・こども支援士）

小学1年生の担任をしています。4月は、いろいろな幼稚園・保育所からやってきた子どもたちの集まりで、自分のことで精一杯の状態ですが、そこから1年経った3月の子どもたちは、周りに気を配ることができるようになり、クラスとしてのまとまりも出てきます。

先日、体育の時間に、自分ができるようになった縄跳びの技を見合いました。そのときに、1月の初めに前跳びが全くできなかった子が、みんなの前で、トントントントと連続で何十回も跳ぶことができました。両腕をぐるっと回して縄を前にもってきて、ピョンとようやく1回跳ぶ跳び方をしていました。すると、その姿を見た子どもたちから、「〇〇君、〇〇君、……」という大きなコールと手拍子がしげんとわき起こりました。友達が1ヶ月間一生懸命に練習してきた跳べるようになったのを、みんな、自分のことのように喜んだのです。もちろん、本人もとてもうれしそうでした。

そういう、心も体も成長した様子を間近で見られるのが、担任の醍醐味です。間もなく修了式。褒めたり叱ったりと、いろいろな出来事を共有してきたかわいい子どもたちとの学級は閉じますが、2年生のお兄さん・お姉さんとしてさらに成長していく姿を見るのが楽しみです。

○村田美保（奈良実践国語作文研究会代表・生駒市立生駒小学校講師・こども支援士）

日本子ども支援学会の皆様、初めまして、奈良県在住の村田美保です。

学生の頃、深谷昌志先生のゼミで多くを学ばせていただき、その当時実施されていた「子どもの聞き取り調査」にも参加し、和子先生からもご指導を受けることが出来ました。

卒業後、奈良県の公立小学校に勤務し、定年後の現在は、奈良県国語教育研究会所属教師の有志で立ち上げた奈良実践国語作文研究会の代表を務めています。

子どもに寄り添う生活綴方だけではなく、作文の基礎基本や技法、評価などに焦点を当て、作文力・論理的思考力などを多角的に高めていきたいと考え、学び合ったことを実際の学級で実践したり、情報交換をしたりして、若い先生方の学べる場を提供しています。

学校現場では、教科指導以外の問題も山積していますが、理論に裏付けされた教育実践・教科指導が必要です。そのため、私自身も、この支援学会で学ぶことによって、現場の先生方や子どもたちの一助になればと思っています。

これからもよろしくお付き合い願います。

〈事務局メンバーによる自己紹介〉

今月は、いつも学会のお世話をいただいている事務局の方々にも、改めて自己紹介をお願い致しました。

○齋藤恵子（貞静学園短期大学教授・こども支援士）：会計担当

事務局会計を担当させていただいている齋藤恵子です。文京区にある保育者養成の短期大学に勤めております。学生は幼稚園教諭免許・保育資格取得を目指し、私は保育原理や保育実習など保育関係の科

目を担当しています。少子化や核家族化、近隣社会との希薄化等から子どもが育つ環境が変化し、子どもをめぐる施設の役割は多岐にわたるようになりました。子どもの視点に立って保育を展開できる保育者を育てていきたいと思っています。

○清 文枝 (テレビ朝日アスク講師・足立区そだち指導員・こども支援士)

：名簿・記録担当

1980年代前半、東京学芸大学の教育学部で深谷和子先生と出会い、子どもの抱える問題について意識するようになる。しかし教師にはならず、札幌のテレビ局にアナウンサーとして入社。その後フリーとなって東京に戻り、NHKの科学番組やテレビ朝日のニュース番組などをキャスターとして担当。自身の子どもが生まれた後は、「シングルマザー」「DV」「アダルトチルドレン」といった家族の問題を、当事者のロングインタビューで切り取ってきた。

5年ほど前からは教える側に回り、アナウンサー養成学校である「テレビ朝日アスク」で大学生やプロの喋り手を教えている。また、同じ頃から地元の公立小学校で一斉授業や集団行動に遅れがちな子どもたちを個別でサポートする仕事も始めた。小学生でも大人でも、教える時の基本方針は同じ。1回の授業の中で、一人一人が自分の変化を感じられるように全力を尽くすこと。「わかった!」「できた!!」が学びへの意欲につながるから。

教員免許と運転免許の他、潜水士の免許を保持。10年ほど続くマイブームは「女々しくて」で紅白に4回連続出場した「ゴールデンボンバー」。

○和田奈々子 (未来教育研究所・こども支援士) : ワークショップ担当

育児も落ち着き本当に自分がやりたいことをしようと、教育に関わる職を探しました。発達障害で困り感を抱える児童の学習支援者講習を受け、いざこれからという時に、家庭の事情で引っ越すことになりました。越した先で学んだ知識を活かす場を探し、学芸大学で実施していた「子どもパートナー養成講座」を受講しました。さらに学びを深めたいと「子ども支援士(アフタースクール)(教育支援)」を受講しました。それがご縁で講座を運営していた東京学芸大子ども未来研究所にて、勤めることとなりました。主に教育支援人材の育成講座を担当し、行政や活動者の課題に応じた講座の企画・運営や新たな教育課題や社会問題をテーマに自主講座を企画・実施しました。

保育園の待機児童が社会問題となった時に、講座聴講で得た知識を生かし保育士資格を取りました。それがきっかけで、東京学芸大学が学内に設置した研究学童に配属され、児童の成長を見守りより良い放課後活動について試行錯誤してまいりました。現在は他にも東京都美術館でアート・コミュニケーターとしてアートを介した子ども支援の活動も行っております。今後も様々な形で子どもの支援に携わってまいりたいと思います。

つれづれ—飛騨高山から伊勢参りの旅

米谷正則

59歳から年一回続けてきた、泊を伴う旅行の10回目(最終)は飛騨高山から伊勢への旅でした。

伊勢神宮へは、中山道終着の京都三条大橋から徒歩にて行きたかったのですが、右足ひざ下ふくらはぎの痛みがあり、無理をしませんでした。2月12日に、最寄駅から新宿へ行き、松本までは「あずさ号」で行き、松本—高山はバスです。このバス路線は天空路線ともいわれています。雪を見ながらのバス旅と思っていたのですが、曲がりくねった山道の陽のあたらないところに残っているだけでした。高山へは数年前の夏に観光していて、雪景色も見たいという思いを持っていました。この日は高山陣屋を見学し、高山ラーメンを食べ、歴史保存地域を歩きました。平日ということもあつたのか、外国からの観光客が多いように見えました。市街でも陽のあたらないところには、数日前に降った雪が少し残っていました。その日のうちに名古屋に行きました。

名古屋駅はJR、名鉄、近鉄とずいぶん多くの人でした。タワーホテルに入り、夕食はお目当ての「ひつまぶし」を食べました。13日の朝は駅構内のお店で有名なモーニングを注文しました。窓

越しに見ていると制服姿の生徒のグループがいくつかあり、時期として受験と一緒に行くのかな、などと思っているうちに次々といなくなりました。名古屋からは近鉄にて五十鈴川駅に行き、昼食やお土産を買う時間も必要だったので、内宮前まではタクシーで行きました。まず五十鈴川にかかっている宇治橋を渡りました。これで橋としては東京日本橋、木曾大橋、岩国錦帯橋、瀬田の唐橋、京三条大橋と有名ところを渡りました。ルートに沿って正宮にお参りをしました。2月22日、23日と薬剤師の国家試験を受験する若い人のために学業のお守りを買いました。そしてネパールの男性と結婚した知り合いの女性のために交通安全のお守りを買いました。その女性のお子さんが、この4月から幼稚園に行くのです。お昼には伊勢海老を食べ、その後に、おはらい町通りにてお土産を買いました。日本人の団体が多かったのですが、外国からの参拝の人も少なくないというように見えました。

伊勢参りをしたので、泊を伴う旅行は今回にて終わりです。現在は、10冊目の単著をめざして、章立てとなる個別論文にとりかかったところです。引きこもりにならないように外に出て、声を出すためにカラオケにも通ってます。右足のふくらはぎの痛みがこなくなったら、奥州街道を白河まで、そして白河以北の奥州奥道中へと青森津軽半島の三厩まで行きたいと思っています。歩き始めましたら、また道中記を書きます。(了)

句会 むさしの

○立春の鉦の高鳴る江戸囃子

安田 勝彦

手短かに言へぬ話しや春炬燵

たい焼きの袋のふたつ明日は晴れ

立春を迎えるとまだ寒さが厳しいものの、華やいだ春の気分となります。江戸囃子の練習の掛け声や「コンチキチ」の鉦の音、春の訪れのようにです。

「ちょっと話があるからさ」まだある炬燵に誘う光景が二句目です。深刻な話なのか嬉しい話なのかいろいろな想像が出来ます。

また、「たい焼き」の句は、これから誰かと食べる楽しさと、たい焼きの温もりが明日もいい日になりそうだと、そのわくわく感を詠みました。

俳句は、読者にどれだけ「景」をイメージさせられるか、なるほどと思わせるかです。この三句から「景」は読み取れましたでしょうか。

○初場所は蹴速も笑ふ徳の勝ち

上島 博

かの人の遺志の高さよ冬銀河

国技館のエントランス 最初に現れるのが、相撲の開祖、我が当麻の人「蹴速（けはや）」の絵額です。この度の徳勝龍の優勝で、奈良県民は98年ぶりの快挙に沸きました。千秋楽結び、大関との堂々たる戦いぶりとともに、インタビューでの笑いあり涙ありの受け答えは、さわやかな共感の拍手で迎えられました。徳勝龍関の人柄（徳）の高さに、私も誇らしい気持ちです。

中村哲先生は、医療だけでは人を救えないと重機に乗って土を掘り、現地の人とともに運河を作り大地に緑を蘇らせました。10万人の農民の生活基盤につながったそうです。日本の価値観を押しつけるのではなく、当地の民族、部族、習俗、政治などを研究し、人々の声に耳を傾けながら、医療活動をスタートさせました。その姿勢は受け入れられ、支持され、大きなうねりとなって多くの命が救われることとなりました。まだまだやりたいことがあ

たという先生の遺志は、必ず引き継がれていくでしょう。先生が世界に遺したものの大きさを、改めて思いました。

○風花も見えずなりゆく路地の奥

市原 潤

きさらぎのひかり集めて山めざむ

野の果ても花舞ひちるや西行忌

(付記) 以下は西行にちなむ駄文です。お暇な折りにお読みください。

学指導要領の改訂で、高校国語は科目編成が大幅に変更されて、現代国語、現代文がなくなり、論理国語と文学国語に二分されることになったようです。人間の情感にかかわる学というものが、国語教育から疎外されていく。こうした傾向は小学校や中学校にもやがて現れるものと思われます。プログラミングなどというつまらないものが、幼児教育にも浸透しつつある。「感情教育」が教科教育から消えていくのは寂しい限りです。

○心なき身にもあはれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮れ

西行

心なきは、従来、出家の境遇でありものの情趣を解さない身の上とされ、一首の意は、それでもこの夕暮れのあはれは心にしみるものだ、というものだった。それほどの幽玄の景色、風情！当代一流の歌人俊成は西行の自家歌合の判を依頼されたが、この歌には負けの判をつけた。俊成は一方に配された平凡な説明的な理に勝る歌を選んだのだった。西行は失望して、この歌の掲載されない俊成撰の歌集は見る価値なしと言ったという。

宣長は歌論『石上私淑言』のなかで、「あはれ」は、もと「嗚呼」という嘆声、情の深く動かされたときの嘆賞の声だと書いている。そう考えれば、西行の情が動いたのは後世の思入れのような、単に夕暮れの寂びしい景色にというのではあるまい。

(小林秀雄もそのように思ったので、この歌は全く評価しなかった。『無常といふ事』)

ものの輪廓さえおぼろげで色彩もない秋の夕暮れ、何の変哲もないありふれた平凡な景色を「幽玄」として評価するには、当時の「教養」が必要だ。しかし「教養」は心に属するので、「心なき身」には、教養が嘆賞する風情はわからない。だから西行が感じたのは、「心なき身」にもわかる身体的な感覚、すなわち音・羽搏きだったにちがいない。鳴の突然に飛び立つ羽音が沢に響く、「ああ、生きているのだ」。命の気配に、あらためて西行自身も自分の命を思った、「ああ、ここに、こうして生きているのだ」と。

新古今集の三夕の歌のもう一つ、

○見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

定家

この歌が、眼には見えないがゆえにこそ、現実の世界には存在し得ない永遠不変の美を、その「非在」において(塚本邦雄『定家百首』)表現し得たように、命の存在もそれじたいを表現することは難しかった。あはれという情すなわち感動そのものを、西行は無を打ち破る一瞬の音への情・感動として表現したのであった。

西行を敬愛した芭蕉の古池の句は、この歌への共感であったに違いない。(了)

イベント情報

第9回ワークショップ 2020.5.9 (土) PM.2:00~4:00

於：東京駅八重洲口 ルノアール会議室

「多国籍化する学校・II」

講師：土田雄一（千葉大学教授）

司会：由田 のぼら（東京成徳高校教諭）

第10回ワークショップ・オープン 2020.8.15 (土) PM.2:00~4:00

於：東京駅八重洲口 ルノアール会議室

発表者：未定

司会：明石要一（敬愛短期大学学長）

みなさま、ふるってご参加ください。会員でない方のご同伴も歓迎いたします

編集後記 (ニューズレター委員会)

コロナ旋風の到来で日常生活にも種々の影響が出始めましたが、「風の便り」の紙上だけは、いつも変わらず豊かで平穏です。

今月は多くの会員による自己紹介の後で、学会の運営を支えてくださっている事務局の「花の3人組」にもご登場いただきました。今後ともどうぞよろしくお願い致します。米谷先生の旅行記、句会の市原先生の西行についてのご解説も、ぜひお読みください。今月も上島 博先生のお手によって、みなさまに、プロ並みに整えられた誌面をお届けできることをありがたく思っております。

みなさま、〈自己紹介〉欄や〈句会むさしの〉、またその他〈近況〉などのお原稿もお持ちしております。お気軽にどうぞ。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉

深谷和子（長）・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2020年3月号目次〉

- | | | |
|-----|-------------------------------|--|
| | 今月の花・今月の詩 | 細江久美子・ゆあさとしお |
| I | 実践報告 | 小川香代子 |
| II | 新書版に見る「子ども問題」 | 深谷昌志 |
| III | 会員談話室 | |
| | 会員自己紹介 | 汪 寒、張 静、徐 曉純、小林未央、川崎佳子
日高眞智子、門脇薫子、吉田佳代、村田美保
(事務局) 齋籐恵子、清 文枝、和田奈々子、
米谷正則 |
| | つれづれ | |
| | 句会 むさしの | 安田勝彦 上島博 市原潤 |
| | イベント情報 | (第9回から第10回まで) |
| IV | 編集後記 | (深谷和子) |